
黒い子猫がくれたもの

春月桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒い子猫がくれたもの

【Nコード】

N9651F

【作者名】

春月桜

【あらすじ】

高校生の女の子がある日、黒い子猫に出会う。そして、その飼主と恋をする。でも、その黒い子猫が変身して友達がその子猫に恋をしたり色々なハプニングが…！！

黒い子猫がくれたもの1 (前書き)

少々、漢字間違いとか言葉のあやがあるとありますがそこは大目に見てもらいたいと思います。

黒い子猫がくれたもの 1

1、黒い子猫との出会い……。

私は吾座氣 巳緒。

高校一年生。

私は今、いつも通っている高校に向かって歩いていく途中。

いきなり黒い子猫が車の下から出てきた。

首輪がついている。

(誰かの飼い猫かな?。まあ、そうだよな。こんなに毛並みがいいもの。一体どんな人が飼ってるのかな?)

私はそう思いながら黒い子猫を撫でていた。

「コロコロー」

黒い子猫は可愛くのどを鳴らす。

「可愛いね。お前。名前はなんていうの?」

私は黒い子猫が応えるはずもないのに、尋ねてみた。

「コロア。」

いきなり声がした。

「うそ！！！！」

私は思わず声を出してしまった。

「あはははは。馬鹿な奴。」

違うところから声がした。

私は声がしたほうを向く。

そこには猫用のお皿を二つ持っている男の人がいた。

「…え、さっき名前言ったのってあなたですか？」

私は動揺しながら尋ねた。

男の人は、茶髪で、右耳にピアスを一つしている。

でも、顔はとても整っていて、かなり美形。

「そうだよ。馬鹿だね。君。まんまとひっかかって。」

男の人は笑いながら言い放ってきた。

「ひどい人ですね。」

私はちよつと睨みながら言い放った。

「あははは、ごめんごめん。でも、そいつの名前は本当にココアだから。俺の飼い猫。」

男の人は綺麗な笑顔で言い放った。

笑いながら私に教えてくれた。

「むう。ココアですか。可愛いですね。」

私は頬をふくらませながら言い放った。

「うん。可愛いよな。子猫。でも、よくココアのこと触れたな。こいつ人が近づくと威嚇したりするんだぜ？俺以外、触れるの見たことねえよ。」

男の人はココアをじーっと見ながら言い放った。

「そうなんですか？いきなり車の下から出てきたんで。可愛いなと思っで撫でてたんです。」

「ふーん。そりゃ、すごい。俺は、誠心せいしん。地影ちかげ。高三。つっても、あんまいかないけどね。地影ちかげって呼んで。」

地影は綺麗な笑顔で私に言い放ってきた。

「はい。私は吾座気。巳緒といいます。高一です。巳緒しじゆって呼んでください。」

私は笑顔で地影に言い放った。

「ふーん。じゃあ、俺より、年二つ下なんだ。あ、そうそう。携番とアドレスを教えてよ。」

「あ、はい。」

私は携番と、アドレスを教えて、学校に向かった。

「また、来てね。」

地影は笑顔で私に言ってくれた。

「はい。絶対。」

.....

学校……

「おはよ。」

私は誰かから肩を叩かれた。

「きゃっ、なんだ。明梨^{あかり}か。びっくりさせないでよ。心臓止まるかと思った。」

この子は私の大親友の柚子道明梨^{ゆずみち}。

「じゅめんじゅめん。びっくりさせるつもりがバリバリあって。いつもより面白いね。今日は。何かあった?」

明梨はニヤニヤしながら私に尋ねてくる。

「えー。どうしようかな？言おうかな？言わないことにしようかな？」

私はわざとらしく楽しく言い放った。

「えー！！あつたなら言つてよ！！ねえ、教えて！！！」

明梨は大声で言い放ってきた。

「はいはい。わかった。教室にいったら教えるよ。」

私は笑いながら言い放った。

楽しく学園生活をしている。

いつもの風景。

なのに、今日はこの日々を変える一日になった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

2、地影からのメール

私は明梨達に今朝あったことを休み時間に話した。

「いいなー。」

明梨と同じぐらい仲のいい、茜あかねが言い放ってきた。

「それって、運命の出会いってやつじゃん。」

明梨が何かを企んでいるみたいな意地悪な顔をしながら言い放ってきた。

「そんなの…ないと…思う。」

私はアタフタしながら言い放った。

「そうかな？きつと、いいことがあると思っよっ…」

茜は私に笑顔で言い放ってきた。

と、楽しく、会話をしていたとき。

いきなり、携帯のバイブが鳴った。

私は何の途惑いもなく携帯を開く。

…地影…

…今日何時に俺の家通る？…

それだけだった。

「え？それって、地影さん？」

茜が私に首をかしげながら尋ねてきた。

「え、あ、うん。」

「なんて？」

明梨が楽しそうに尋ねてきた。

「今日何時に俺の家通る？って。」

私は携帯を見せながら、明梨と茜に話した。

「えー、なんか、カレカノみたい〜。」

明梨は頬をちょっと染めながら楽しそうに言い放った。

「そんなんじゃないよ。でも、とりあえずメールは返信しとこ。部活が終わるのって、七時くらいだから、八時だよね？」

私は指で数えながら尋ねた。

「丁度そのころでいいんじゃない？」

茜は親指を立てながら言い放った。

私達三人はバスケット部で、特に仲がいい。

私達はみんなそれぞれ、親友同士。

だから、何でも言い合える仲間なんだ

そして、私は地影に返事した。

・・・巴緒――

・・・八時くらいだけど。何か用？――

私はそう打って送った。

地影の返信はとても早かった。

・・・地影――

・・・いや、家にあがってくかなくたって。ココアに会いた
かな？って。・・・

地影のメールにはそう打ってあった。

「すごい、なんか危険な香りを感じるぞ。まさか、一日で…。」

「そんなこと言わないの！！そんなことあるわけないでしょ？？
?!?!?!」

私はおかしなことを考えている明梨に焦りながら言い放った。

「そうかなー。」

茜まで、私に言ってきた。

「もう、二人ともバカ!!!!!!」

私はそう言いながら、地影に返信する。

……巴緒……

……いいんですか？ココアに会いたいです。……

私はちよつとえへつと笑いながら、そう、打って返信した。

そして、返ってきた答えが……。

……地影……

……ココアだけ？……

そう返ってきて私はびっくりした。

そのすぐ後にまたメールがきた。

……地影……

……なーんて。うそ。じゃあ、今日待ってるから。……

と、メールがきた。

このとき、私は、複雑な気持ちになっていた。

ホッとしたような、ちよつと残念なようなで。

よくわからない。

きつと、何かがあの人と会って変わった。

それはわかるんだけど。

後の何が変わったのかわからない。

地影

何で、あんなメール送信したんだろう？

全然わかんねえ。

「ニャー。」

ココアが俺に近寄ってきた。

「何だ？ココア。」

「ニャー。」

ココアは何かを言いたいみたいだ。

「地影。あの子可愛かったね。」

ココアは、捨て猫だった。

雨の中ぐったりとして、今にも死にそうだったので、拾ったのだ。
はじめてしゃべったときは驚いた。

ココアは初めはずっと俺に牙を向いていた。

きっと、人間が信じられなかったのだろう。

今だって、俺と巳緒以外は心を開こうとしない。

俺はそういうことは人一倍読める男だから。

こいつの辛さも俺が一番わかってやれる、だから、俺はこいつを飼っている。

「誰のことを言ってる？」

「さあ？誰でしょう？」

ココアは楽しげにそういう。

(相変わらず、口が悪い。)

「ぶざけんな。後、あいつの前ではちゃんと猫つかぶりしとけよ。」

「はいはい。俺には黙っていると、ひどいね。自分はしゃべるくせに。独占したいんだろ？でも、俺だってあの子とおしゃべりしたいよ。」

「追い出すぞ？」

「わかったよ。地影のバカ！！！」

ココアは怒りながら言い放った。

「バカで結構。」

俺はさっきのココアが言い放った言葉が心に残って、頭の中でそれが歌みたいに流れる。

「独占したいんだろ？」

この言葉にちよつとグサツときた。

俺自体もこれはわからない。

でも、もし、俺があの子を好きだとしても、あの子は付き合ってはくれないだろう。

だって、俺不良みたいなものだから。

負け犬みたいに思う。

世間では、みんなに引かれる存在と付き合うなんて、絶対にありえない。

あの子とは、あまり仲を深くしないことにしよう。

俺はそう決意して、仕事に取り掛かる。

俺の仕事は小説家。

でも、結構売れてる小説家。

ペンネーム、あきひで明秀みのる穰。

ミステリーやファンタジーを書いている。

俺は、今フツと浮かび上がったものを小説にする。

それは恋愛の小説。

あの子とのことを書くころ。

あまり考えなくても、カタカタ、カタカタ、指が動いていく。

すげー。

俺はただ、その光景驚きながら打っているだけだった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

3、地影の家

放課後……

私は部活も終わり、私は途中まで茜と明梨と一緒に帰った。

みんなそれぞれ別れる所があつて、みんなその道で一人一人に別れる。

そこを通つて、今朝の車のところに来た。

そしたら……

「おー。来た来た。」

地影が窓から顔を出して、楽しげに言い放つた。

「お邪魔してもいいですか？」

私は地影に聞こえるように、ちよつと声を大きく言い放つた。

「いいよ、ちよつと待ってて。」

数分秒後……。

ガチャッ

「どうぞ。」

地影は笑顔でドアを開けてくれた。

その時に抱きつきたくなるほど綺麗な笑顔だった。

「ありがとうございます。」

私は靴を脱ぎ、ちよつとお邪魔させてもらった。

家の中は洋風の内装だった。

和式もあるみたいだけど。

その部屋は一つだけだった。

和式は仕事をするところだそう。

後は全部洋風にしたらしい。

でも、リビング以外は絨毯じゅうたんがしきつめられてる。

リビングは広いからか、大きい絨毯が一つ、机と椅子をかこっている。

「地影の家って広いね。いいな。」

私はリビングを眺めながら言い放った。

「そうか？普通こんくらいじゃね？」

地影は普通に言い放った。

「地影は何の仕事をしてるの？」

私は気になったので何でもなさそうな顔をしている地影に尋ねた。

「借金の取り立てや。」

地影はサラッと言い放った。

私はすぐさま、引いた。

目をウルウルさせながら。

「うそうそ。ごめん。でも、仕事はあんまり教えたくないんだ。だから、話せるときになったら話すよ。」

「そっか。わかった。それまで、楽しみに待ってるね。あ、そういえば、ココアは？」

私は地影に尋ねた。

「あ、呼べば来るよ。」

「え、ココアって頭いいんだね。」

「ああ、まあね。小さい頃から躰しづけてあるからね。」

「すーい。ココアー。」

私はココアを呼んでみると……

「ニャー。」

ココアが出てきた。

「おお、ココアー。会いたかったよ。」

私はココアにスリスリと顔をくっ付け合った。

「お、おい。それは……。」

地影はちよつと焦りながら言いかけた。

「うれしいな。」

知らない、男の声がした。

「え？何か地影言った？」

私は恐る恐る尋ねてみた。

「ううん。全然。一言もしゃべっていませんよ？」

地影はちよつと苦笑いしながら言い放った。

「うそ？じゃあ、誰？」

私はキョロキョロ見渡した。

「灯台下暗しだよ。」

「ん？」

私はココアのことをみた。

「俺だよ。」

「ココアだったの？猫って普通しゃべれないよね？」

私は頭が混乱していく。

「大丈夫？かなり混乱してそうだけど。」

地影は、ちょっと意地悪な顔をした。

「もう。ひどい。」

「俺ね、変身もできるよ。」

ココアはそう、自慢げに話した途端。

「パーン…。」

「な？こうしたら、巴緒に抱きつける」

変身して、男の人の姿になったココアがいきなり抱きついてきた。

「きゃあ。」

私は思わず叫んでしまった。

だって、ココアが……イケメンなんだもん。

髪の毛は綺麗な透き通る金髪で、目が黄土色になっていて。

すごく美形。

「コラ、どさくさに間切れて巳緒に手出してんじゃねえよ。」

地影が怖い目つきをして、ココアを睨む。

(どうして、そんなことしてくれるの？ねえ、教えて？)

私は心で悩んでいた。

私と地影とココアはみんなでいろんな話をした。

私の学校のこととか、地影とココアの休日とか、趣味とか。

とても楽しかった。

そして、時間を見たら、九時半になっていた。

「ヤバイ。私そろそろ帰らなきゃ。」

私はちよつと焦りながら言い放った。

「あ、巳緒、忘れ物。」

チュツ。

いきなり人間化しているココアが頬にキスをしてきた。

「え?」

私は驚いて、呆然としてしまった。

「いきなり、何するかと思ったら。そんなことをー！ー！！」

地影は私のすぐ隣にいたココアの耳をつかみながら距離を離れた。

「ごめんな？こいつが、変なことしちまって。」

地影は苦笑いしながら私に優しく言い放った。

「全然。今日はとても楽しかったです。ありがとうございました。」

私はお礼を言って、玄関に向かった。

地影とココアも一緒に下りてきてくれた。

「送ろうか？」

「あ、いや、いいです。ここから結構近いので。」

「じゃあ、俺が猫になって、送ってく。」

「あ、そうだな。そのほうが安心かも。行って来いココア。」

「はいはい。」

「あ、くれぐれも口緒に変なことをするなよ？」

「はいはい。」

「いつも同じ時間に来るの？」

「あ、はい。多分。でも、多少違うと思います。」

「そうか、じゃあ、ココアが居ると思うから。声かけて。」

「あ、はい。」

「それと、敬語やめろよ？」

「は…うん。じゃあ、バイバイ。」

私は手を振りながら地影の家を出た。

その後、私はココアと話しながら帰った。

その時間はとても楽しい時間となって、私の宝物になった。

私は無事に家に帰り、眠りについた。

.....

4、恋する茜

翌日…

私は、ココアがいたので、ココアと、地影に手を振って学校に向かった。

昇降口で待っていたのは、やっぱり、ニヤついている、茜と明梨だった。

「何、ニヤついてんの？二人とも。」

私は同じように二人にニヤつきながら言い放った。

『わかってんでしょ？』

二人はハモリながら言い放った。

「わかってる。昨日のこと話せて言うんでしょ？」

私は靴を履き替え、飽きれながら二人に言い放った。

『わかってるじゃない。』

(こつこつときだけ、意見があつんだから。困る。)

私はため息を一つついた後、二人に話した。

「えーそうなんだ。何もなかったんだ。」

明梨が残念そうに言い放ってきた。

「何かあったら、どうするつもりだったの?!」

私は焦りながら言い放った。

「いや、別に。はっきり言って何もしない。」

「うまくいくことを願う。」

二人は顔を真剣にした。

「はいはい。どうせそうだと思ったよ。」

私は呆れながら言い放った。

「あー!!!!私宿題してない。忘れてた!!!!」

茜が大声で言い放ってきた。

「早く教室行って、宿題を終わらせなさい!!!!」

私は怒りながら階段を指差した。

「いってきまーす!!!!」

茜は焦りながら言い放って、階段に向かって走っていった。

「何であの子は。」

私と明梨はため息をつきながら言い放って、教室に向かってゆっくり歩いていく。

.....

放課後：

部活も終わり、帰ろうとしたときに。

「巴緒！！」

いきなり私の名前を呼ぶ人がいた。

私は振り向いたさきには、人間化したココアが私に手を振っている。

「ココア。何でここにきたの？」

私はココアに首をかしげながら尋ねた。

「いや。巴緒を迎えに来た。」

ココアは綺麗な笑顔で言い放ってきた。

(それは、反則でしょ?)

私は心の中でそう考えた。

「あ、ありがとう。」

私はちよつと苦笑いをしながら言い放った。

「巴緒！その人誰？」

明梨が私のほうに走ってきながら、尋ねてきた。

「その人が地影さん？」

茜も一緒に走ってきた。

「ううん。違うよ。」

（どうしよう、猫なんて言えない。従兄って言うておじい。）

「この人は従兄の光輝こうき。同い年だよ。」

私は必死にうそを考えた。

「へー。そんなカツコイイ人がいたなんて、教えてくれてもいいじゃないの。」

明梨はちょっと怒りながら言い放ってきた。

「じめん。」

私は作り笑いをして言い放った。

「ん？茜？」

明梨がココアを見たまま固まっている茜を呼んだ。

「茜、どうしたの？」

私はボーっとココアを見る茜に尋ねる。

「ん？あ、いや、何でもない。」

茜はその時にはにこやかに私達に返事を返した。

でも、私と明梨は後で気づく。

茜がこのとき、ココアに恋してしまったことを……。

.....

私は四人でちょっと話した後。

ココアと二人で帰った。

その時間はとても楽しくて、忘れたくないほどだった。

ココアは話がとにかく面白くて、きつと話す人みんな笑うだろう
ってくらい。

私はココアの話に笑ってしまふ。

家……。

私は家に無事につき。

のんびり、ココア（飲み物の）を飲みながら月を眺めていた。

「静かだなー。」

私はそうつぶやき一口ちよっとほろ苦いココアを飲んだ。

今日は満月。

一つ大きく月が浮かぶ。

その光景はまるで、神秘的で。

何にも捕らわれない。

とても、寂しそうに浮かんでいる。

「きっと、太陽が恋しいだろうな。いつもこんなじゃ、元気なんてでないでしょ？」

私は月にそうつぶやいた。

もし、私が太陽なら、きっと、月は…。

私はそれから、考えずにココアを飲み、歯を磨き、すぐにベットに入った。

私は誰を言おうとしたんだろう？

.....

翌日…

「そんな人じゃないと思う!!!」

茜は確信しながら言い放った。

(こんなときにこんなに自身があるし!!!!!!茜のバカー!!!
!)

「とりあえず性格が知りたいの。メールアドレス知ってる?光輝君
の。」

茜は本気みたい。

「ごめん。あの人携帯持ってないんだ。」

これは、本当のこと。

「えーうそー。てゆうか、さっきから巳緒ひどくない?」

茜は怒り出す。

(そんなこと言ったって、相手は猫なんだよ?!)

私は心の中でそう叫んだ。

「いや、し、ごめん。」

私はごまかすしかできなくなった。

「まあ、まあ、茜も、怒らない。巳緒も巳緒だからね。」

明梨はこの場を治めようとして、言ってくれた。

「まあ、とにかく。教室いこ。巳緒は、茜のこと応援してくれるよね？」

明梨は私に尋ねてきた。

「え？う、うん。」

私は苦笑いで言い放った。

() 何でこうなるの？今日、地影とココアに話そう。()

私は心の中でそうつぶやきながら、明梨と茜と一緒に教室に向かった。

.....

昼休み…

昼休みにも、茜は光輝君「コリア」の話ばかり。

「今何してるだろう。」

「仕事なんだろう。」

「やっぱり、カッコイイー！ー！」

など、いろんな言葉がいつぱい出てくる。

(何で、そんなに出てくるんだろう?)

私は飽き飽きしながら聞いていた。

でも、どうにかして、ココアのことを諦めさせないと。

ココアは人間じゃない。

一人になりたい。

私はいきなりそう頭の中で思った。

そして…。

「屋上に行って来るね。」

「え?何で?」

茜は私にびっくりした顔で尋ねてきた。

「いや。ちょっと、屋上で深呼吸してきたくなくなったから。」

私は苦笑いでうそを考えながら茜と明梨に言い放った。

「あ、そう?じゃあ、いつてらっしゃい。」

明梨は笑顔で私に言ってくれた。

「うん。また、後で。」

そう言って、私は教室を後にした。

屋上…。

スーハー…。。

私は大きく一回深呼吸をした。

「ニャー。」

いきなり、後ろから猫の鳴き声でした。

振り向いた先には、黒い子猫がいた。

「？その首輪、コロア？」

私は黒い子猫に尋ねると…。

「そっだよ。」

黒い子猫はちょっと微笑みながら私に言い放った。

「やっぱり。で？何しに来たの？」

「散歩。ここ穴場なんだ。すごく気持ちよく日向ぼっこができるから。」

ココアはとても、ルンルンになりながら言い放ってきた。

「へー。確かにね。私はあんまり来たことがなかったから、よくわかんなかった。私も日向ぼっこしようっと。」

私はもうすでに寝そべってるココアの隣に寝そべった。

そこには、真っ青な青い空。

スカイブルーの色をしていて、とても綺麗。

「何もかも忘れられるね。」

私は一言つぶやいた。

「うん。そうかもね。」

ココアは気持ちよさそうに言ってきた。

「黒色で暑くない？」

「うん。ちょっとだけね。でも風が冷たいからちょっといいよ。」

そうして、何気ない会話が楽しく弾んでいた。

そして…。

くキーンコーンカーンコーンく

チャイムが鳴り響く。

地影は笑顔で言うから、私は顔がまっかっかになった。

「何赤くなってるの？」

「地影はちよつと意地悪っぽく言い放った。」

「地影の意地悪。」

「私はそつつぶやいた。」

「そつだけど何か？」

「もう、知らない。」

「うそぞそ。ごめん。待ってるから一緒に帰ろつ？」

「うん。わかった。」

そして、何分かして私は着替え終わり。

地影と今歩いているところ。

「今日は何かいい事あった？」

「え？いや。逆にいやな報告をされた。」

「なにそのいやな報告って。」

「友達がココアのことを好きになっちゃったの。人間の姿のね。」

「は？あいつは人間に変身できるけど。元は猫だぞ？」

「そんなことわかってるよ。でも、変身できる猫なんだなんていったら大騒ぎになるでしょ？絶対そんなこと言えないよ。言わずに説得しようとしても、ひどいって言われるし。どうもできないの！」

私はため息まじりにそう言い放った。

「そっか。よくあるんだよな。だから、あんまりココアに人間の姿になってほしくないんだよ。」

地影は落ち込みながらそうつづばやいた。

「そっだったんだ。」

私はちよつと関心しながら言い放った。

「巳緒がほれるんじゃないかっていうことも不安だったけど…。」

地影はうつむきながらそうつづばやいた。

「今、なんて言った？」

「え？あ、いや、なんでもない。それより、俺と晚ご飯一緒に食べよう。」

「え？あ、うん。いいよ。じゃあ、お母さんに電話しとく。」

黒い子猫がくれたもの1（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。
感想を付けてもらえたらうれしいです。

黒い子猫がくれたもの2（前書き）

字が間違っているところもあるかもしれませんが、そこは大目に見てもらいたいと思います。

私はひもが取れた瞬間思い切り言い放った。

「悪かったね。君にこんなめにあわせたのは他でもない。あの地影という男に復習するためなんだよ。あいつにはこの傷のかりがあるからね。」

男はいきなり右肩を出し、私に痛々しい傷を見せてきた。

やけどのような跡。

「何…それ。」

「あいつに負わされた傷さ。なんて残酷なんだろうね。」

「で？私に何をしろと？」

「何もなくていいさ。俺がする。」

男は怖い笑みで私に言い放ってきたと思ったら、私のスカートのポケットから、携帯を取り出し、地影に電話をした。

「已緒か？！今どこにいるんだ？！おい！！！」

「俺は已緒じゃない。已緒という女は俺が預かった。この女がほしければ一人で00倉庫に来い。」

ブチッ

男はそう言って電話を切った。

「随分卑怯なことするのね?!」

「威勢がいいな?お前なんてどうなってもいいんだぞ?あいつがくれば。」

私は思いつきり強い力であごをつかまれた。

「自分からどうどうと行けないなんて、意気地なしね。」

「こいつー!...」

その時だった。

「そいつにふれんじやねえよ!...!!」

聞き覚えのある声。

「地影!...!!」

私はそう叫んだ。

「待ってる今そっちに行くから。」

地影はそう言つともものずい勢いで走り出した。

「お前らーやっちなえ!...!!」

男がそう言つときいきなり何人も影から出てきた。

「おらー!...!!」

大戦争の始まりになってしまった。

「一人でなんて卑怯よ!!!!!!」

私は隣でその光景を楽しんでいる男に叫んだ。

「何とでも言え。あいつは向かってくるぜ。お前のが好きなんだから。」

私は最後の一言にびっくりした。

「お前のことが好きなんだから」

ある分けないそんなの。

「……」

私はなぜか、泣いていた。

傷だらけになりながら私のことを守ってくれる地影を見て。

「やめて。もういい。いやだよ。」

私は泣きながらずつとつぶやいていた。

その時だった。

グッ

くない。って、今思った。でも、やっぱり、好きなんだ。」

「已緒……」

「二人の世界にはいんなよ。」

バン

私はコンクリートの地面に頭を振り落とされた。

「おい!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

地影はすごい怖い顔になって叫んだ。

「ごういう女、大っ嫌い。前の女もそう言って、結局違う男を作りやがった。」

「心を閉ざした哀れな野獣。っていったところ？」

私は鼻で笑いながら言った。

「てめえー!!!!!!!!!!」

男は真っ赤になりながら怒りだした。

「バカね。」

「いい加減にしろー!!!!!!!!!!!!!!」

男はいきなり金属の棒を取り出してきて私の頭をなぐるうとした

その瞬間。

バシッ

「地影。」

そこには棒をつかんでいる地影の姿があった。

私は思わずつぶやいてしまった。

「俺の女に何しようとしてんだコノヤロー!!!!!!!!!!!!!!」

地影は反撃しだした。

そして、あっという間に何人もの人を倒した。

「はあ、はあ、はあ、大丈夫か？」

地影はにそう優しくつぶやいて、私の繋がっていたひもをほどいてくれた。

「地影。ありがとう。」

私は泣きながら、地影に抱きついた。

「俺のせいでごめんなこんなめにあわせちゃまって。」

「地影、私とずっと一緒にいて。もうこんなになってほしくないよ。」

「ああ、ずっと一緒にいてやるよ。こんな…不良でもいいなら…な。」

フラッ

バタンッ

「地影？地影、どうしたの？地影？！地影————！！！！！！」

……

病院…

「？ここは？」

「気がついた？ここは病院だよ。」

「あ、俺あれから倒れたんだ。」

「そっだよ。びっくりしちゃった。倒れた理由は、疲労の一種だつて。疲れがたまっちゃって、倒れただけだって、安静にしてればすぐに治るって。よかったね。」

「そうなんだ。てゅーかずっとついててくれたのか？」

「え？うん。そうだけど。何で。」

「いや、ありがとっな。今度またそういうことが起こったら絶対俺

が助けに行くからな。」

「うん。ありがとう。」

「おし、はやいところ治さないとな。」

「うん。はやく元気になってね。」

私は地影に笑顔で行った。

そうして、時間が過ぎていった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

6、思い出の場所

地影は二日で退院した。

そして、今、病院からの帰り道で歩きながら帰っている。

「こんなところあったんだね。」

私が見つけたのは、川が近くに流れている小さな公園だった。

「綺麗だね。」

夕焼けで赤く染まった公園はすごく綺麗で切ない感じだった。

「ちょっとおぼえているよ。」

「いいよ。」

私達は公園に入っっていった。

「なんか、見たことあるような気がする。」

私には何故か見覚えがあった。

「何か懐かしい感じがするな。」

地影も何かを思い出すかのようにつぶやいた。

「地影もそう思うっ?」

「ああ。」

何かが頭の中でフル回転している。

どンドン、思い出がよみがえってくる。

~~~~~

「あーん、あーん。」

小さい頃の私が大泣きしている。

さっきの公園だ。

スタスタスタ…

私と同じくらいの小さい男の子が歩いてきた。

「どうして泣いてるの？」

小さい男の子が私に尋ねている。

「猫ちゃんが…」

小さい頃の私の隣には倒れてるココアに似た黒猫がいた。

でも、大人の黒猫だ。

「泣かないで。」

男の子が小さい頃の私の涙を拭ってくれた。

~~~~~

ここ、私の記憶にある。

どっぴいっぴいっ？

私達ここで一度逢ってるの？

「私達ここであったことがあるの？」

私はボソツとつぶやいた。

「そうなのか？」

「そつだよ。」

いきなり後ろから声が出た。

「え？」

「ココア？何でここに？」

「それは僕が聞きたいよ。」

「どうなってるの？」

「どうもどうもこの三人はここで一回あった事があるんだもの。」

「どついつとだ？」

「俺は君達に縁があるらしい。じゃあ、わからないなら教えてあげる。全部ね。」

．
．
．
．
．
．
．
．
．
．
．

次に続く…

黒い子猫がくれたもの2（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。
次回を楽しみにしていただけると嬉しいです。

黒い子猫がくれたもの3

7、私達の縁

「君達はまだ、とても小さかったかな。五歳くらいだと思う。俺は可愛い子が遊んでるなーと思ってこの公園に入った。そして、巳緒ちゃんが話しかけてきたんだ…」

~~~~~

「猫ちゃんどこからきたの？」

巳緒ちゃんは僕を撫でながら尋ねてきた。

ちょっと強く叩かれて、俺は寿命もあつたから、そのままシヨック死してしまつてね。

俺は大変かわいそうなことをしてしまったと思つたよ。

君はきつと責任感を感じて、泣いてたんではないかと。

だから、俺はこうして、成仏して、もう一回この子に謝るつもりだ。

そしたら、君が来たんだ。

~~~~~

「地影。君だよ。」

「俺がココアと巳緒にあつてた？」

「そう。君達はあつてたんだ。俺とも。でも、俺は生き返る意味が無くなったね。本当は君なんていなければよかったのに。地影なんて。」

ココアはいきなり怖い顔になって、地影に向かって走り出した。

「な、何すんだ。ココア！……うっ！……！！！」

ガンッ

ココアはいきなり地影をグーで殴った。

「ココア?!」

「何すんだよ！……！！猫のくせに変身しやがって……！！」

「お前なんかいないほうがいいんだよ！……！！」

いきなり二人は喧嘩になりだして、私は止めようと思ったんだけど。

なかなか入り込めない。

.....

二時間後……

「はあ、はあ、はあ、久しぶりにお前と喧嘩したな。」

「ああ、そうだな。一番初めにあったときに超傷だらけになったよな。」

「ああ。超懐かしい。」

辺りはもう暗くなっていた。

「私、入れてもらえなかった。」

私は一人でむくれていた。

「ごめんな。勝手に俺らで遊んじゃって。」

「いいよ。怪我したくないし。」

「ごめんね。だからむくれないで。むくれた巴緒ちゃんも可愛いけど。」

ギュッ

ココアは私に抱きついてきた。

「あ、おい。」

「ついでに膝枕。」

ガンッ

「いで！！！！！」

私の足にココアが頭をのせようとしたその時、地影がココアの頭を思いつきり殴った。

「俺の女だ。」

「え？？？！！！！言っちゃったの？地影。」

「は？ああ。告ったけど？」

「えー！！！！！！ひどい！！！！俺がもらおうと思ってたのに。」

「そんなわけあるか。」

「あははは、ごめんねココア。でも、ココアを最初見たとき王子様？って思ったくらいカッコイイから安心して。すぐ恋人できるから。」

「ぶー。今頃言われてもうれしくない。」

そうして時間が過ぎていった。

.....

8、一緒に登校？

翌日...

私はいつものように学校に登校する。

地影とココアに手をふるうとした瞬間。

「？私の通ってる高校の制服。何でココアが着てるの？」

私は何故か私の高校の制服を着ているココアに尋ねた。

「今日から僕巴緒ちゃんの通ってる高校に行くことになった。」

「何で？」

「巴緒ちゃんと一緒にいたいから。」

「地影は許してくれたの？」

「いや。」

「え？いいの？」

「校長には話はとうしてあるから。」

「いいんだ。」

「じゃあ、いいや。行こうか。」

私はあきれて、ココアに言った。

「うん！ー！」

明梨が超大声で言い放った。

「うるさい。明梨。」

「でも、よかったね。超おめでたじゃん。」

茜がうれしそうに満面の笑顔で言い放った。

「うん。ありがとう。」

「何かあったらこれからも言ってね。」

明梨が笑顔で言い放った。

「うん。約束する。」

こうして、楽しい一時が終わった。

.....

ホームルーム…

「みんなにお知らせがあります。今日は転入生が来るぞー。」

先生はいつもの笑顔でみんなに言い放った。

「えー!!!男?女?」

一人の男子が先生に大声で尋ねた。

「うるさいからだまっとれ!!!!!!!!!!」

先生は大声で怒鳴った。

「すみません。」

「よろしい。入って来い!!!!!!」

ガラッ

入って来たのは、やっぱり人間の姿になっているココアだった。

「光輝君!!!!!!!!!!」

茜は大声で叫んだ。

「あ、茜ちゃんだー。これからよろしくねー。」

ココアは茜にさわやかに言い放った。

「はい!!!!!!!!!!よろしくお願ひします!!!!!!!!!!」

茜はすごい大喜びした。

「知り合いだったんだな。まあ、とりあえずみんな仲良くしてやっ
てくれ。」

『はい。』

そうやって、私の後ろの席になったココア。

「かっこいいね。」

一人の女子がココアを見ながらひそひそと話しているのが聞こえた。

「うん。マジ、好きなんだけど。」

もう一人の女子が喜びながら話していた。

(全部聞こえてるんですけど…。)

私はそう、心の中でつぶやいた。

「ねえ、ねえ、巳緒ちゃん、俺モテてるね。」

ココアはちょっと満足そうに笑って私に自慢してきた。

「そうですね。」

私は呆れながら言い放った。

「次の時間は数学だからな。」

先生はほがらかに言い放った。

『えーーーー!!!』

教室中がうるさくなった。

「じゃかわしいわ!!!」

先生はそう言って、教室から出て行った。

そして、その先生が教室から出た瞬間、ココアに質問攻めがあったのは言うまでもない。

ココアに質問しているのはほとんど女子だけで、男子は質問したくてもできない状態らしい。

「はあー。これは疲れることになりそう。」

私はそうつぶやきながらため息を一つした。

「大変だね。」

そんな、今も疲れきっている私につぶやいた、明梨がいた。

「明梨はいいの？質問しなくて。」

「え？別に。私はねえー、あそこまでして男をゲットしたいなんてないからね。」

明梨は苦笑いしながら私につぶやいた。

「ふーん。あれ？茜は？」

私はフツと思った。

そして、話していると…

「光輝君、今日私と一緒に帰ってくんない？」

いきなり一人の女子がココアを誘ってきた。

「え？」

「だめ？」

女子はウルウルな目をさせながらココアに尋ねてきた。

「ご、ごめん。部活を見たいんだ。」

「そう？ならいいわ。また、今度一緒に帰ってね？」

「う、うん。」

そして、一人の女子は去っていった。

「モテる男はツライね。」

私は苦笑いしながらココアに言い放った。

「はあー。」

ココアは深くため息をついた。

「俺、何の部活に入ろうかな。」

ココアは悩みながら言い放った。

「じゃあ、バスケ部くれば？練習きついけど。」

私は笑顔でそう言い放った。

「それもいいかもね。」

ココアはにこっと笑い言い放った。

「おし、決まり。明梨ー、茜ー。行くよー？」

私は部活に行く準備ができた二人に呼びかけた。

『はい。』

二人は一緒に言い放った。

「光輝君も、仮入部ってことで、一緒に行こう？」

茜は笑顔でココアのことを誘った。

「うん！ー！」

ココアは返事をしながらうなずいた。

.....

部活……

「パスパス!!!」

コーチの怒鳴り声が聞こえる。

一年生でレギュラーをとれてるのは私と茜と明梨だけなのです。

だから、いつも試合には出るし練習はかせない。

その様子を見ていたココアは…

「すごい。」

啞然としていた。

「三人とも、仲いいからチームワークがすごいな。目で合図になってるもん。こりゃ、強いよ女子。」

「関心してる場合じゃないんですけど？あんたも、この高校のバスケット部に入りたいならそれなりの覚悟がなきゃ無理だよ？この高校はバスケット部だけじゃなくて、他の部も結構県大会に行くのもいっぱいあるんだから、特にこのバスケット部は全国いくから、大変だと思うけど。覚悟ある？」

いきなり、マネージャーらしき人が俺に尋ねてきた。

「はい!」

俺はすごい勢いで返事をした。

「おし、今日から、まずは体作り、筋トレを多少それから、違うコートでパス、ドリブル、シュートの練習わかった？」

「はい。」

「私はこのバスケット部のマネージャーをしてる笹船 梨乃。梨乃でいいから。よろしくね。」

梨乃は俺に手を差し伸べた。

「うん。よろしく。」

僕はにこっと笑った。

「じゃあ、筋トレから……」

「茜？どうしたの？」

私は茜を呼ぶ。

「え？あ、い、いや。」

茜は苦笑いをした。

「光輝君が気になってるんだよ。」

明梨がこっそりと教えてくれた。

「ああー、そういことね。」

私は手を叩き納得した。

「きつと、嫉妬してるんだよ。梨乃に。」

明梨はちよつと心配そうに茜を眺めながらつぶやいていた。

「うーん。茜の力になるにはどうしたらいいのかな？」

「私達は相談されてから動いたほうがいいと私は思う。」

明梨は私の耳元で言い放った。

「うん。そうだね。無理矢理くっつけようとしても逆になっちゃうしね。」

「うん。そうだよ。」

私と明梨は二人で話し合っていた。

.....

9、いきなりの告白

ココア（光輝）…

「はい。次、腹筋十回。」

「はい。」

俺と梨乃の個人別授業になっていた。

「なかなかいい根性してるねあんた。」

「そうですか？」

(いきなりなんだこの女。)

俺は心の中でそう思った。

「ねえ、顔もイケメンだし、どう？私と付き合ってみない？」

いきなり言われたこの一言で俺は腹筋が止まっていた。

「え？」

「だから、私と付き合いおうよ。」

この梨乃とかいう奴は俺にいきなりこんな言葉呼びかけてきた。

あつて数十分しかたっていないのに、こんなこと普通言っか？

俺は混乱していた。

まったくとして、手を引かない女。

こっぴう女。

嫌い。

てゆうか苦手。

「はい、決定。」

「は?!」

いきなり言い出したこの女は「ね?」とか言って、筋トレに話を移した。

俺は押し通されてしまった。

(どうなるんだろ?これから...)

俺は心の中でぼやいた。

.....

ダンダン、シュツ、ガシャンツ...

茜はさっきからシュートの練習をしている。

でも、まだ、シュートが入らなかった。

「ねえ、やっぱり様子おかしいよ。」

私は明梨に耳元で相談した。

「うーん。まあね、さつきから全然シュート入ってないからねえ、いつもならほとんど入ってるのに。」

明梨はちょっと心配そうにつばやいた。

「……。」

茜はシュートで入らなかったボールを見ながらボーっとしていた。

まるで、何かを考えているかのように。

その時だった…

バンツ！！！！

「みなさん注目ー！！！！」

いきなり、梨乃が大声で叫びながら体育館に入ってきた。

茜はこのとき、きつと傷ついたから…

ここから逃げ出してしまったんだと思う。

.....

次に続く…

黒い子猫がくれたもの3（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。
また、次回のものを読んでくださったら嬉しいです。

黒い子猫がくれたもの4

10、茜の苦しみ

「みなさんに報告しまーす。今日から、私と光輝君がお付き合いたしまーす!!」

いきなり入って来た梨乃から飛び出して来た報告は、なんとも残酷なものであった。

「は？またかよ梨乃マネ付き合っの。」

一人の男子が大声で梨乃に言い放ってきた。

「お前いつもバスケット部の男子に手つけるよな？」

また一人の男子が言い放ってきた。

ダンッ…

一瞬バスケットボールの落ちる音が鳴ったと思ったら…

ガラッ、タッタッタッタ…

体育館の重い扉を思いっきり開けて飛び出していったのは…

「茜ー！！！」

私は飛び出していった茜をおった。

『茜。』

私と明梨と一緒に茜のことを抱きしめた。

「私達がいるよ。茜には。梨乃なんかには茜は負けないよ。だって、茜のほうが何百倍も、何千倍も可愛いもん。」

私は茜に笑顔で言い放った。

「そっだよ。しかも、バスケだってうまいし。元気で明るいし。」

明梨は茜の頭を撫でながら言い放った。

「……ありがとう……二人とも。」

茜は泣きながら笑顔で私達に言ってくれた。

.....

体育館……

「さー、もう一頑張りいくよー！！！！！！」

一人のバスケット部の女子のキャプテンが大声で言い放った。

『はい！！！！！！』

バスケット部の女子全員が大声で言い放った。

「男子もいくぞー!!!!!!」

『ウツス!!!!!!!!!!!!』

男子もそう叫んだ。

「本当に付き合ってますか？」

俺は梨乃に尋ねた。

「当たり前じゃない!!!!」

梨乃はすっごい満面の笑みで言い放ってきた。

「はあ。」

俺は大きいため息をついた。

.....

部活終わり……

「ねえ、ねえ、三人で肉まん食べに行こうよ。」

明梨が言い出した。

「うん。いいね。」

私はその話にのった。

「茜も行くよね？」

明梨は茜に尋ねた。

「うん。」

茜は笑顔で私と明梨に言い放った。

「やったー。」

明梨は喜んだ。

なんだかんだ言っつて茜が笑顔だったことをちょっと安心していた私と明梨だった。

.....

コンビニ前…

「うまーい！ー！」

明梨が超喜びながら言い放った。

「うん。おいしい。」

私は付け足した。

「茜？」

私はボーっとしている茜に尋ねた。

「え？あ、何？」

茜はちよつと焦りながら言い放った。

「いや、なんかボーっとしてたから。」

私は笑みを浮かべながら言い放った。

「ちよつとね。」

茜は作った笑顔で私に言い放った。

「茜ピザまん？えーやっぱりあんまんだろ？」

明梨はその光景を見ていたみたいで盛り上げようとしてくれたみたい。

「えー肉まんだよー！！！！」

私はその話に移した。

「ピザまん！！」

茜は自身ありげに言い放った。

「あんまん！！」

俺はとうとうキレてしまった。

「え？」

「俺はお前と付き合うなんて言っていないだろ???!!!!」

「たとえば、あなたが私から逃げようとしても私は追いかけていくわよ。あなたは私のもの。」

この梨乃が言った言葉に俺はゾクツとした。

(何なんだ?この笑み。)

かすかに笑みをこぼした梨乃の顔が怖かった。

「じゃあ、今日はいいわ。一人で帰る。言っとくけど、私はあなたと付き合ってるってみんなに言うから。」

梨乃はそう言葉を残して、帰って行ってしまった。

「はあー。疲れた。」

俺を一言そう言って帰っていった。

.....

地影の家...

「ただいまー。」

俺は学校から地影の家に戻ってきた。

「何で、学校に行った？」

地影は顔を怖い顔にし、指をポキポキと鳴らしながら俺に尋ねてきた。

(怖っっっ!!!!!!)

俺は心の中で恐れた。

「いや、だって、行ってみたかつたんだもん。」

「行っていいなんて言ってないよな??!!!!」

「ご、ごめん。でも、明日から毎日行くから。じゃ、おやすみー
!.....」

ダダダダダダッ...

俺は急いで自分の猫用ベットに逃げた。

「あ!!!!コラ、逃げるな!!!!」

地影はその後追いかけてきたが、ベットに入った瞬間来なくな
た。

「じゃあ、せめて、約束してくれ。巳緒に変なことはするな。それ
と、巳緒になにか危険があったら俺に言ってくるかお前が守ってく

れ。」

地影は真剣な顔で頼んできた。

俺は元々この顔が苦手だ。

どうしてもこの顔をされると…

「うん。わかった。」

と、言ってしまうから。

「おし、それなら学校楽しんで来い。」

地影は笑顔で俺に言いながら撫でてくれた。

俺はこういう地影が大好きだ。

撫でてくれる手が、大きくて温かくて、今までに感じたことのない愛情を感じれるから。

「うん。」

俺はそう言って、ちょっと満足そうに顔を変えた。

「じゃ、俺は仕事に戻るかな。」

「がんばって。」

「いいな猫って暢気で。」

携帯のバイブが鳴った。

「誰？」

私は携帯を開いた。

……地影——

……今どこにいるんだ？……

地影は心配してくれたみたい。

……巴緒——

……今は二人と別れる道の近く——

私はそう打って、地影に送った。

——地影——

……今からそっち行くね。暇だし。……

地影からそう帰ってきた瞬間：

「おい、巴緒！」

地影の声がした。

「地影。はやいね。」

私は私の近くに寄ってきた、地影に笑顔で言い放った。

「まあね。走ってきたから。」

私は息切れしている地影を見て笑った。

「さ、帰ろっ？家まで送ってく。」

地影は手を差し伸べながら言い放ってきた。

「ありがとう。」

私は地影の手の平に手をのせた。

私と地影は手を繋ぎながら帰った。

.....

翌日...

地影の家の前にココアが落ち込みながら、立っていた。

「ココア、おはよう。」

「おはよ。」

ココアは元気なさげに言い放った。

「大丈夫？昨日のこと？」

「うん。あいつに逢うの嫌だ。」

「でも、行かなくちゃね。」

「うん。がんばる。」

「梨乃はいい噂がないからね。バスケット部に入ってきたイケメンは必ずといっていいほど被害者が多いからね。しばらくは彼女ぶると思っよ。」

私は苦笑いしながら、言い放った。

「はあー。」

「じゃ、行くう。」

「はい。」

私は窓から顔を出している地影に手をふり、歩き出した。

そして、しばらく歩いていると茜がボーっと立っていた。

「あ、茜。何してんの?」

私はボーっとしている茜に尋ねた。

「え?あ、巳緒。巳緒と一緒に行くうと思って。でも、何で光輝君がいるの?」

「ああ、家と同じ方向なんだ。だから、いつも、そこで会うの。」

「へー。梨乃はいいの？彼女なんだから朝一緒に来ればいいのに。」

茜はちよつと落ち込みながら言い放ってきた。

「あれさ、あいつが勝手に言ってることだから気にしないで。俺は絶対付き合いたくないから。俺は断り続けるよ。」

ココアが言ったこの言葉に茜はすごい明るくなった。

「え？本当に？や…やったー！！！！已緒ー！！！！」

「何でそんな喜ぶの？」

ココアは私のことを抱きしめている茜にいきなり尋ねてきた。

「え？それは…。」

茜はちよつとつまりかかった。

「いや、茜が久しぶりに勉強してきたんだって。いつも茜勉強しないからさ。超すがすがしいんだって。」

私は無理矢理話しを変えるようにして言い放った。

「そうなの？」

ココアは茜に聞きなおした。

「なによ。それ。」

「梨乃は付け足した。」

「その性格なおしたほうがいいんじゃない？」

「茜は梨乃の真正面にきて言い放った。」

「は？あんだ誰？」

「バスケット部のマネージャーなのに知らないの？」

「う…うるさいな。わかってるわよ。」

「じゃあ、言ってみてよ。バスケット部の人。」

「渡部でしょ。それから柚本に、伍気でしょ、それから…」

「全員男じゃない。あんだって男のことしか頭にないのね。最低な人間ね。」

「茜はそう言い捨てて、教室に向かった。」

「は???!?!?!ふざけんなよ!!!!!!」

「梨乃は怖い顔で怒鳴った。」

「あ、茜！ちょっと待って！」

黒い子猫がくれたもの4（後書き）

最後まで楽しんでいただけたでしょうか？
楽しんでくれていたら嬉しいです。

黒い子猫がくれたもの5

12、梨乃の復習と新しいカッ

ブル

ガラッ…

茜は教室の扉を開けた。

みんなはいつものように騒がしい。

「お、おっはー。茜、已緒って茜？なにそのムツスー顔。超怒ってるんですけど。」

明梨は恐る恐る尋ねてきた。

「さっきねー。梨乃と喧嘩しちゃって。茜が。」

私はさっきの一部始終を話した。

「そういうことね。だからこんなにむくれてるの？」

明梨は隣にいる茜を指差しながら尋ねてきた。

「うん。」

「ふーん。でも、それってヤバイと思うよ。」

いきなり、怖そうな顔をしながら私と茜に言い放ってきた。

「友達と話してるときに聞いたことがあるんだけど。梨乃にたてつくとレディースの人ら呼んできて、ハブにされるんだって。噂があるよ。まあ、実際ボコられた人もいるらしいよ。」

「え？やばくない？どうすんの？茜。」

「どうするもこうするも。もうたてついちゃったし。」

「一応私は、茜を守るけど。」

「私も。」

「ありがとう。二人とも。」

.....

部活終わり……

「さ、三人で帰ろう。」

私は部室で着替え終わった二人を呼んだ。

『うん。』

二人は笑顔で返事してきた。

ガチャツ・バタン

私達は部室を出た。

そのときだった。

「梨乃にたてついたって奴。あんた？」

いきなり茜に近寄ってきた女の人達がいた。

白い特攻服をきた女の人達。

「そうですけど。何か？」

「そうですけど。なにか？だって。こいつ誰にたてついてんのかわかってねえよ。」

リーダー的な人が笑いながら言い放った。

「よくも梨乃さんに喧嘩うったよね。」

いきなり怖い顔になり…

バンッ

茜が叩かれた。

「なにすんだよ！！お前ら！！！！」

明梨は女の人達を睨みながら怒鳴った。

明梨は暴走族の兄が三人もいるのでこういうのは慣れっこらしい。

「あ?!誰に口きいてっと思っただ?!」

一人の女の人が言い放ってきた。

「大人数でなきゃ何もできねえのかよ?!?!あ?!?!随分意気地なしだな?!?!あ?!?!」

明梨は怖い顔で今にも噛み付きそうぐらいで怖かった。

「あ?!?!んだと?!?!聞いてればいい気になりやがって!?!?!」

女の人達は怒り出した。

「おらあー!?!」

殴りかかりそうなきだった…

「やめろー!?!?!」

大きな声が体育館に響き渡った。

「あ?!?!誰だよ?!?!お前?!?!」

「光輝だけど?その子達に手出しちゃ俺が許さないよ?」

ココアが首を回しながら近寄ってきた。

「あ!?!茜ちゃん!?!大丈夫?!?!」

ココアは茜に駆け寄った。

「だ、大丈夫。」

茜は無理に笑顔を作った。

「誰だよ。やったの。」

「は???!!何?」

「やったの誰だって聞いてんだよ?????!!!!!!!」

ココアは怖い顔で怒鳴った。

「私だよ……」

ガンツ!!!!!!

一瞬時が止まったと思った。

「リーダー!!!!!!」

ココアはリーダー的な女の人をいきなり殴った。

「次、相手になりたい奴は?」

ココアは怖い顔で手招きしてきた。

「す、すみませんでした!!!!!!」

女の人達は逃げていった。

「さすが女。弱いな。大丈夫？茜ちゃん。俺のせいでごめんね。」

ココアは私の隣で座っていた茜に心配そうに尋ねた。

「あ、ありがとう。」

茜は苦笑いしながら言い放った。

「せっかく可愛い顔が台無しだね。」

ココアは茜の頬を撫でた。

「大丈夫。」

茜は泣きそうになりながら、言い放った。

「私と明梨は外で待ってるね。後で一緒に帰ろう？」

「え？うん…うん。」

「じゃあ、お二人でどうぞゆっくり。」

「じゃあ、いくよ。明梨。」

「ほいよ。」

タッタッタッタッタ…

「無理に笑顔つくなくてもいいんだよ？」

「……。」

「俺の胸使っていいから。泣きな？」

「ひっく、っひ、っひっく。」

ギョッ

「怖かったよね？ごめんねもう少し早く来れば、こんな怪我なかったのに。」

茜ちゃんは首を横にふった。

「私…光輝君の…ことが…好き。」

茜ちゃんは泣きながらつぶやいた。

「茜ちゃん。それ。本当？」

「え？…。」

茜ちゃんは顔を上げた。

その瞬間…

俺はそっとキスをした。

「俺も、茜ちゃんが好きになっちゃった。」

俺は笑顔で茜ちゃんに言い放った。

「うわーん。」

「何で???!」

「よかったー。」

「よかったねー。あー熱い熱い。てゆーか、私一人だけじゃん。彼氏いないの。」

「あはは、ドンマイ。」

今日は微笑ましい記念日になりました。

.....

13、明梨の事情

私達は教室で話していた。

「ねえ、ねえ、トリプルデートしない?」

茜が暢気に誘ってきた。

「異議ありー。私、彼氏いないー。」

明梨が手を上げながら言い放った。

「明梨は好きな人いないの？」

私は明梨に尋ねた。

「え？いるけど？」

明梨は平然と言い放った。

『は?????!?!?!』

私と茜は大声で驚いてしまった。

「なに？何で？そんな変なこと言った？」

明梨は私達に尋ねてきた。

「なに？じゃないわよ。何で言わないのよー!?!?!」

私は明梨に怒った。

「巳緒と茜に言っでどうするの？」

「そりゃ、協力するよ。」

「いいよ。私のは、かなわない恋なの。それに、私はあんま女の子

系じゃないからね。」

明梨はちよつと寂しげな表情で言い放った。

「かなわない恋って？」

茜が明梨に尋ねた。

「実りたくても、実れない果実ってこと。」

明梨は呆れながら言い放った。

「そうなの？」

茜は私に尋ねてきた。

「私にはちよつと違う意味なような気がする。」

私は苦笑いで言い放った。

「まあ、とにかく手出ししなくていいから。」

明梨は苦しそくに言い放った。

「それじゃあ、トリプルデートできないじゃん。」

茜はムスツとした顔でふてくされた。

「ダブルデートしてきなよ。」

明梨は茜に言い放った。

「それじゃあ、意味無いの。何をするのも、三人がいいの！……！」
茜はちよつと寂しげに言い放った。

「今回は仕方ないでしょ？諦めて、ダブルにしながら。」

「じゃあ、せめて恋してる人を聞かせて。」

私は明梨に怒りながら尋ねた。

「しょうがないな。真ん中の兄貴。」

明梨はため息をつきながら言い放った。

『う……うそー！……！……！……！』

「……！……！……！」

『う……ごめん。』

「だから言ったじゃん。かなわない恋だった。」

明梨は落ち込みながら言い放った。

「そうだったんだ。」

「兄貴はね。不良だけど、私には優しくかったんだ。一緒に遊ぼうって誘ってくれたり。一緒に祭りに行ってくれたり。一回だけ、いじ

められたときに助けてくれたり。いろんなことしてくれるんだ。今だって、いつも仲いいんだ。いつも一緒に遊んでくれる。だから、どうしても諦めがつかないんだ。」

明梨は何かを思い出すかのように言い放った。

「明梨がそんなに傷ついてたなんて。知れなくごめんね。」

私はちよつと落ち込みながらつぶやいた。

「別にそんな気にすることじゃないよ。私が言わなかったただけだし。」

明梨は作り笑いをしながら私に言い放った。

「まあ、まあ、そう落ち込まずに。」

明梨は盛り上げようとしてくれているみたいだったので。

この話しはしないようにした。

.....

部活終わり……

「茜は今日も光輝と帰るの?」

私は茜に尋ねた。

「うん。じゃ、バイバイ。」

茜は頬を赤く染めながら手をふって帰っていった。

「バイバイ。」

私は茜に手をふった。

「さ、じゃあ、私達も帰ろう?」

私は着替え終わった明梨を誘った。

「うん。」

明梨はいつもと同じだった。

このときは...

.....

帰り道...

「やっぱり言ったほうがいいのかな?」

明梨は歩いている途中にポソッとつぶやいた。

「うーん。まあ、言わないよりはっきりすると思っぴゃ?」

私は遠くを見ながら言い放った。

「やっぱり？でも、言えない気がする。それに兄貴には彼女いるかもだし。」

明梨は寂しげな顔をしながら言い放った。

「かもでしょ？いないかもしれないじゃない。」

「でもさ。私は血のつながってる妹だからさ。無理でしょ。」

「えー。付き合うのもだめなの？」

「それはわからないけど。」

「でしょ？ならいいんじゃない。あたって砕ける。体育会系なんだから。」

「そうだね。じゃあ、気持ち伝えてみる。」

「うん。がんばれ。」

いつの間にかいつもわかれるところに来ていたので。

「じゃ、バイバイ。」

「バイバイー。」

手をふって帰った。

そして、目の前には……地影。

「帰るっ?」

地影はそう言いながら手を差し伸べてきた。

「うん。」

私は地影が差し伸べてきた手の平に手をのせる。

.....

深夜...

ブーブーブー...

寝ている途中携帯のバイブになる。

「電話?誰だろっ?」

私は寝ぼけながらそのかかってきている電話に出た。

ピッ

「はい。」

「もしもし?巴緒?」

「うん。」

「お願い、今すぐ家の前に来て。ひつく。」

ブチッ

「明梨が泣いてた？」

ガチャッ

私は家の前に来た。

「已緒」。っひつく。っひ。」

明梨は泣いていた。

「どうしたの??!!」

「私、家族と血、繋がってないみたい。」

「は???!!!」

「私、今日。帰ってきたら、お父さんとお母さんが喧嘩してたの聞いてしまったの。」

「何を言ってたの。」

「私はお父さんの会社の人の娘だったんだけど。その人の奥さんが交通事故で亡くなっちゃって。その会社の人は一人じゃ、育てられないからって。お父さんに引き渡したんだって。」

「え???!!!」

「どっしょよう。私。あの家族の中にいられない。ひっく、っひ、ひっく。」

「明梨。とりあえず。私の家によ？外なんかいたら風邪引いちやうよ。」

私は明梨を家に入れようとしたら…

「明梨——！！！！！」

暗い道から走ってくる誰かが見えた。

「兄貴…？」

明梨はつぶやいた。

「え？」

「明梨。やっと、見つけた。」

「兄貴。来てくれたんだ。」

目の前にいるのは片方の耳にピアスを一個つけてる人でジャケットを着ていて、ジーンズをはいている。

そして…裸足。

「兄貴…なんで裸足なの？怪我するよ？」

明梨は苦しそうな顔しながら言い放った。

「心配させやがって。いきなり出てくんもんだからびっくりしたよ。」

明梨のお兄さんは地面に座り込んだ。

「だって。私だけ血、繋がってない。」

「は？言っとくけど。歩^{あゆむ}だって血繋がってねえよ。」

*…歩というお兄さんは三番目のお兄さんです。

「え？あゆ兄も？」

「ああ。あいつもお前と一緒にの母親だよ。だから歩も血は繋がってない。」

「でも、私は邪魔ものじゃん。」

「邪魔なんかじゃねえよ。お前もいてこそ俺達の家族じゃねえかよ。」

お兄さんはすごい優しい笑顔で明梨に言い放った。

「兄貴。私。兄貴が好き。」

明梨は突然言い放った。

「は？」

お兄さんは呆然としている。

「私は兄貴が好き。」

「俺？」

「そう。」

そう言い放った明梨の顔は真剣だった。

「まあ、そうだろうとは思ってたよ。俺もだよ。明梨。」

お兄さんは笑顔で明梨に言い放った。

「兄貴ー！！！」

明梨はお兄さんに抱きついた。

「ある意味血繋がってなくてよかっただろ？」

お兄さんは笑った。

「確かに。」

明梨は笑いながら言い放った。

「ち、帰るぞ。」

「うん。あ、待ってて。」

明梨が私のほうを向いてきた。

「ありがとうね。巳緒。また学校でね。」

明梨は元気よく私に言い放った。

「うん。それと、おめでとうー。」

「ありがとう。じゃあ、バイバイ。」

「バイバイ。」

そして、明梨はお兄さんと一緒に手を繋いで帰っていった。

.....

次に続く…

黒い子猫がくれたもの5（後書き）

次回はついに最終話なので、読んでくれたら嬉しいです。

黒い子猫がくれたもの6（前書き）

いよいよ最終話です。

最後まで読んでいただけたらうれしいです。

黒い子猫がくれたもの6

14、地影の職業

学校…

「えー！！！！そんなことあったの？私もその場にいたかったー。」

茜は今朝の出来事を話たら怒り出した。

「そんなこと言ったって、茜に電話してたら、絶対起きないと思っただももん。」

明梨は頬をふくらませながら言い放った。

「私ってそんな信頼薄いんだ。」

茜はがっくりしたようにつぶやいた。

「まあ、まあ、ハッピーエンドで終わったんだからいいでしょ。」

私はこの場を丸く治めた。

「まあ、いいけど。あ、そうそう。知ってる？超人気作家の明秀穰が、初めて恋愛小説書いたんだよ？私、この人の書く小説大好きでさー。この小説読んで超感動しちゃった。」

茜は小説を抱きしめながらすごいハイテンションで言い放った。

「へー。知らなかった。」

私は茜が抱きしめている小説を眺めながらつぶやいた。

「貸してあげるよ。」

茜は笑顔で言い放った。

「ありがとう。読んでみる。」

私は茜から小説を借りた。

「明梨はいいの?」

茜は明梨に尋ねた。

「いや、いいよ。私そういうの興味ないから。」

明梨は苦笑いしながら遠慮した。

「そう?なら、いいや。」

私達はそんな感じで話していた。

.....

部活終わり……

「まあね。ニュースでも、とりあげられてるからな。」

「そうなんだ。全然知らなかった。」

「ふーん。読んでみた？」

「うん。ちょっと。でもさ、どこかしら私に似てるんだよね。女の子。」

「うーん。まあね。」

「何で？」

「だって、女、お前だもん。」

「は？」

「だから、女はお前なの。」

「あのお。まさか。この小説家って……地影？」

私は恐る恐る尋ねてみた。

「まあね。でも、言うなよ誰かとかに。」

「う…うん。」

私はとてもびっくりした。

「誰にも知られてないんだ。だから、本当は言いたくなかったんだけどな。お前には隠したりするのはいやだから。言っとく。」

「だから、教えられるときになったら教えてくれるって言ってたんだ。」

「うん。」

「でも、何かうれしい。」

「何で。」

「だって、このときに地影がどう思ってたのかわかるじゃない。」

「あ、そんなの考えてなかった。よく思うと何気にハズイな。」

「えへへ。」

地影は頬を赤く染めた。

「照れちゃってー!!!」

「うるせー。」

とてもこの時間がうれしい時間になった。

だって、また一つ、地影のことが知れたんだもん。

そして、今度、トリプルデート行くことを説明した。

.....

15、トリプルデート

「楽しみだね。」

「うん。」

「ヤバイ。」

私達は楽しそうな遊園地を後ろに待ち合わせしていた。

今はまだ十五分前。

だから、まだ、私と茜と明梨の女子三人しかない。

「誰が最初に来るのかな？」

私はちよつとわくわくしながら言い放った。

「もちろん、私の光輝よ。」

茜が言い張る。

「えー、私の春徒はるとだよ。」

明梨が怒鳴った。

*…春徒は二番目のお兄さんで、明梨の彼氏。

よく解らないかたは「第五話」を読んでくれたらいいかなと思います。

「私の地影。」

私はボソツとつぶやいた。

そして、五分後…

「早いねー随分。」

歩いてきたのは、春徒さんだった。

「やっぱりねー。」

明梨は自慢げに私と茜に言い張った。

『ブー。』

私と茜はブーイングした。

「何が？」

春徒さんは、ちょっと戸惑いながら言い放った。

「まあまあ。」

明梨はちよっと嬉しそうに言い放った。

「お、もうそろってるな。」

地影が近くに来て言い放った。

「あ、地影。つてとなりに光輝だ。」

私は見ながら言い放った。

「当たり前だろ。だって…ん？」

私は急いで地影の口を手でふさいだ。

「しー！！茜と明梨は知らないからさ。」

私は小声で地影に言い放った。

「茜なら知ってるよ？巳緒ちゃん。」

ココアは私に笑いながら言い放ってきた。

「え？猫ってこと？」

私はココアに小声で尋ねた。

「うん。茜には全部話した。隠してたって無駄じゃん。」

私に笑顔でココアが言い放ってきた。

その笑顔はまるで世界で一番大事なものだよ？と私に語りかけているようだった。

一番前は茜とココア。

やっぱり熱々でいつまでも手を繋いで歩いている。

二番目には明梨と春徒さん。

二人はなんだか大人。

色々楽しそうに話しながら歩いている。

そして、三番目には私と地影。

私達は何故かポーっとしながら歩いている。

「喉渴いてないか？」

地影が気遣ってくれた。

「あ、うん。大丈夫だよ。ありがとう。」

私は地影に笑顔で言い放った。

(なんかギクシャクしてるような気がする。)

私は心の中でそうつぶやいた。

「そっか、渴いたら言ってくれよ？買って来るから。」

地影は優しい笑顔で言い放った。

「ありがとう。」

私は笑顔で言い放った。

(相変わらず綺麗な笑顔だなー。)

私は心の中でそう実感した。

「ねえ、ねえ、次、お化け屋敷行かない？」

いきなり茜が私達に尋ねてきた。

「いいじゃん。」

春徒さんは喜びながら言い放った。

「うん。私も行きたい。」

明梨が笑顔で言い放った。

私は一気に青ざめた。

「ん？どうした？巳緒。」

地影が私の顔を覗き込むように言い放った。

「私、お化け屋敷トラウマがあって行きたくないんだよね。」

私はちょっと照れながら言い放った。

「それならお前らは行って来いよ。俺と巳緒は出口で待ってるから。」

地影はみんなに言い放った。

「え？地影？」

「いいから。座ろつ。」

地影はすぐ横にあったベンチに私を座らせた。

「う、うん。ありがとう。」

「じゃあ、行って来まーす！！」

茜はそう言い放って、お化け屋敷に入ってしまった。

みんなそれに引き続き入っていった。

「いいなー。」

「大体、なんのトラウマだよ。」

「ああ、言っただけじゃなかったね。実はね、小さい頃にお父さんと入って歩いている途中にお父さんとはぐれちゃって一人でさまよってて、やっと出口でお父さんにあっただの。で、一人で歩いている途中、いんなお化けに襲われて、すごい怖い思いをしてそれが心にどうしても残ってて、今でも、お化け屋敷が怖くてさ。」

私は思い出を話した。

「へー。でも、家族との思い出があるっていいな。」

地影はちよつと寂しそうに言い放った。

「何で？地影は行かないの家族と。」

「行かないよ。家族なんていないからね。」

地影は何か思い出すかのように遠くを眺めながら言い放った。

「俺の親父は大企業の社長をしてて、毎日が忙しくて、おふくろはおふくろで、超人気読者モデルで、みんな忙しいんだ。兄は親父の会社をつぐっていうし。姉貴はスカウトされて、モデルをしていてみんな全然暇なんてないから。みんなそれぞれやることがあるのに、俺には何も無くてさ。だから、つまんないのを紛らわす為に小説を書いた。それでなのにこんなに売れた。何故かそのことが無性に腹が立った。」

「何で？」

「さあ？何でだろうな。でも多分、俺の中で誰でもいいのか？っていう言葉があったのかもしれない。」

「そうなんだ。私、何も知らないんだね。地影のこと。」

私はちよつと寂しげな顔になりながら言い放った。

「は？」

「だって、いつも、一緒にいるのに、地影のこと全然知らない。」

私は、落ち込みながら言い放った。

「別に、普通なんじゃねえの？」

「だって…」

「人つてもんはさ、わからないから面白いんじゃない？」

地影は微笑みながら言い放った。

「え？」

「知らないほうがいいこともあるし、知っておかなくちゃいけないこともある。でもさ、知らなかったっていつもものいっぱいあるじゃん？だからさ、人つてその人と一緒に日々を共にするんじゃないの？」

地影は私の頭を撫でながら言ってくれた。

「うん。そうだね。」

私はちよつとホツとしながら言い放った。

「これからも、仲良くしてこうな？」

「うん。」

私と地影が話していたら…

「もう！！こんなとこで話してるなんて！！！探しちゃったじゃない。」

いきなり、明梨が言い放ってきた。

「あ、ご、ごめん。」

私は苦笑いをしながら言い放った。

「もうー！！！さ、じゃあ、次いつか！！！」

茜はまだ楽しいーっと言いながらはしゃいでいた。

「もう、疲れたよ、茜。」

明梨はちよつと休みながら言い放った。

「えーまだまだいけるよー！！！」

茜はだだをこね始めた。

「聞いてよ巳緒ー、お化け屋敷の中でもこの子のせいで大変だったのよ？お化けの中の人をわざと怒らして、その人に追い掛け回されたのよ？おかげで足が痛いわよ。今日ちよつとヒールが高いのに。」

明梨はため息をしながら私に言い放ってきた。

「そりゃ、大変だったろうに。」

私は遠い目をしながら言い放った。

「えー。」

茜はちよつと落ち込みながら言い放った。

「しょうがないでしょ？茜。諦めてちよつと休憩しようっ。」

私は落ち込んでいる茜に言い放った。

「…。」

「じゃあ、俺と行こうか？茜ちゃん。」

ココアは茜に抱きつきながら言い放った。

「いいの？」

茜はちよつと心配そうに言った。

「大丈夫。俺は結構根性あるからね。さ、行こうっ。」

ココアは茜の手を握りながら違う乗り物のほうに向かった。

「えらいねー光輝君。」

明梨は感心しながら言い放った。

「うん。さすがだよ。」

私は笑顔になりながら言い放った。

「さ、じゃあ、ここからは別行動にしようか？」

私は明梨に尋ねた。

「そうだね。そのほうがいいよ。じゃあ、後のことは携帯で。」

「そうだね。じゃあ、バイバイ。」

「バイバイ。」

私達も別行動になった。

「これからどうしようか？」

私は地影に尋ねた。

「どうしような。」

「じゃあ、ちょっとお茶でもしようか。」

「そうだな。」

私達は椅子に座った。

「なんか元気ない？地影。」

「え？いやーまあ、なんか人が多いところあんまり好きじゃないんだよ。」

地影は苦笑いしながら言い放った。

「え？じゃあ、外でようか？」

私は地影の顔を覗き込みながら尋ねた。

「でも…」

「いいの。だって、元気ない地影見るのいやなんだもん。それに…」

「それに？」

「それに…地影がずっといろんな人に見られてるの嫌なんだもん。」

私は顔を赤くしながら言い放った。

「あははは。お前って本当に可愛いな。」

地影は笑い出した。

「何それー！！ひどーい。」

「あはははは、ごめんごめん。じゃあ、外出ようぜ？」

地影は私の手を握りながら出口に向かった。

.....

・
・
・
・

16、二人のすれ違い

薄く茜色に染まっている空。

なんだか、何かを語っているように見える。

ちよつと、寂しさがある。

きつと月のことを考えてるんだろう。

私と地影は手を繋ぎながら、ゆっくりと歩く。

地影が私の歩幅に合わせてくれている。

本当に地影は私に気遣ってくれてる。

私はそんな地影を好きになった。

そして、地影は私のことを好きになってくれた。

地影、ありがとうね。

あなたのすべてが愛しいよ。

「地影。」

私は前を見ながら歩いてる地影に呼びかけた。

「何？」

地影はちよつと微笑みながら私を見つめてきた。

「地影は私のこと…好き？」

私は地影にそつと問う。

「いきなりなんだよ？」

地影は驚きながら、私に言い放った。

「いや、なんとなく。」

私はそつと目線を落とす。

「不安？」

地影は私の顔を覗き込んできた。

「いや…別に…。」

私は苦笑いをしながら言い放った。

「大好きだよ。」

地影は繋いでた手を強く握り締めながら言い放った。

私は地影の顔を見た。

なんて綺麗な笑顔だろう。

この人に私はふさわしいのかな？

私は胸が苦しくなった。

「どうした？」

地影が心配そうに私に問う。

「何が？」

私は知ってる癖に地影に問う。

「何か、元気が無くなってないか？」

地影は私の顔を覗き込みながら言い放った。

「ばりばり、元気だよ。」

私は笑いながら、地影に言い放った。

「そっか？それならいいんだけどな。」

ねえ、私には何がしてあげられる？

私は地影の顔を見つめながら考えた。

今の私って地影にふさわしい女の人？

私はそんなこと思いながら歩いていた。

ブー…ブー…

スカートのポケットに入っていた携帯のバイブが鳴った。

パカッ

携帯の画面は薄く光り、メール受信と教えていた。

メールは明梨からだった。

――明梨――

…今どこ？…

私はそのメールを読んですぐに返信した。

…巴緒――

――遊園地を出たよ。今、外だよ。…

私はそう送って、返信を待つ。

「ちょっと、座ろうか？」

地影は微笑みながら私に問う。

「うん。」

私も微笑みながら、すぐ傍にあったベンチに腰をかけた。

「疲れたか？」

「大丈夫だよ。」

「そっか。なら、よかった。」

会話終了…

なんか、寂しいな。

私はちよつと残念がりながら心の中でつぶやいていた。

ブー…ブー…

携帯のバイブが鳴った。

パカッ

…明梨…

…私達は帰るけど、どうする？…

「地影、みんな帰るって言うてるよ？私達どうする？」

私は地影に問う。

「俺はもう少しここにいたいかも。」

地影は茜色の空を眺めながら、言い放った。

「わかった、じゃあ、先帰ってもらおうよ。」

私は笑顔で言い放った。

「先帰っててもいいぞ？」

「え？」

ズキッ！

私の心臓が跳ねた。

「暗くなったら大変だろ？」

「そ…そうか…そうだよな？…じゃあ、私も…帰るよ。」

私はちよつと潤んでいる目を隠しながら、言い放って逃げた。

タッタッタッタッタッタ…

私は走った。

息が切れるまで…

足が痛くなるまで…

零れ落ちる雫を拭いながら。

「あ、已緒だ。」

遠くからでも茜の声がわかった。

「なんかおかしくない？」

明梨はちょっと深刻な目をして言っていた。

ギュッ

私は明梨の胸に飛び込んだ。

「やっぱり。」

明梨は苦しそうにつぶやいた。

「ひっく……ひっく。」

「どうしたの？已緒。」

明梨の優しい言葉にもっと涙が溢れ出した。

「とりあえず、みんなで帰ろう？」

コクッ

私は小さく頷いた。

.....

・
・
・
・

電車の中…

「そういうことね。どつりでおかしいと思ったわよ。一人でしかも走ってきたんだもん。」

明梨は私に呆れながら言い放った。

「どつちもどつちもだと思っよ？」

ココアが言い放った。

「うん。わかってるんだ。」

「じゃあ、何で泣いてたの？」

茜は私に問う。

「わかんない。でも、胸がいきなり苦しくなった。」

私はまだちょっと潤んでいる目を隠しながら言い放った。

「本当は「傍にいて」って言ってほしかったんだよ。」

明梨は私に言い放った。

『え？』

みんなが一声に言い放った。

「だから、好きな人には傍にいてほしいもんなの。きっと、帰っていいよって言われたのが傷ついたんでしょ。」

明梨はちよつと怒り気味に言い放った。

「確かにそうかも。」

茜がボソツと言いつた。

「私も、好きな人といつも一緒にいたいもの。」

ギョッ

茜はココアの腕を抱きしめながら言い放った。

「……。」

「地影さんは地影さんできつと巳緒が危ないからって気を遣ったんでしょ。」

明梨はすごく真剣で冷静でこういう明梨はすごいと思う。

「うん。わかってる。地影はひどい人じゃないもん。」

信じてる。

信じてるよ。

だけどね、時々…不安になるんだよ。

あなたの一つ一つの行動とか、言葉が私の心を動かすんだよ。

ねえ、地影、私、信じてもいいの？

.....

17、ずっと一緒

私は家についてからすぐに自分の部屋に戻った。

ベットになっところがり真っ白な天井を見つめた。

「地影……。」

私は思わずつぶやいていた。

ブー……ブー……

いきなり携帯のバイブが鳴った。

……地影——

……今から外に出てこられる？——

メールは地影からだった。

私はそっと、窓の外を見た。

下に携帯を片手に手を振っている地影がいた。

私は急いで家の外に出た。

「何で。来たの？」

私は驚きながら言い放った。

「いや、さっきは悪かったなって思って。」

地影は頭をかきながら言い放った。

「え？」

私は目を見開きながら言い放った。

「泣いてたから。」

地影は心配そうに言い放った。

「気づいてたんだ。」

私はうつむきながら言い放った。

「まあね。俺さ、考えてたんだ。」

地影はいきなり話し始めた。

「已緒にとって俺って支えになれてるかな？ってちょっと不安になつてたんだ。」

地影はちょっと寂しげに言い放った。

「もしかして、私が地影に聞いたから？」

私は反省しながら言い放った。

「ちょっとね。」

地影は苦笑いしながら言い放った。

「地影。私ね、きつと地影のこと信じてなかったんだと思う。私、地影にふさわしい人なのかな？つてすごく不安になったんだ。みんなは地影はかっこよくて私はブスの女つて見られることが私、苦しい。地影が変なふうに言われるのが私いやなの。でも、それは地影を傷つけたんだね。ごめんね。」

私は目からこぼれ落ちる雫を拭いながら地影に言い放った。

ギョッ

「地影？」

私は地影の腕の中で地影を呼んだ。

「俺こそ、ごめんな。でも、好きだから。俺の中で、巳緒が一番大切だから、本当はずつと傍においておきたい。でも、巳緒は俺だけのものじゃない。巳緒を必要とする人はいっぱいいるから、だから、傍にいちゃいけない気がした。意気地なしだよな。」

「いやだねー。」

私はこのうざい男が好き。

私がだれか？って？そんなの決まってるじゃない。

父は売れてる小説家。

母は年が二つ違いの大物ファッションデザイナー。

そして、私はその父母ちちははの名前が両方の具わっている、長女。

もう少ししたら、もう一人家族が増えるんだ。

楽しみ。

私はこれから中学校に行くの。

そして、バラ色の人生を送るんだ。

好きな人と一緒にね。

父母のよつに...

『ミヤアー。』

「おはよう。シュガー、レモン。」

黒い子猫がくれたものゝ終わりゝ

黒い子猫がくれたもの6（後書き）

どうでしたか？

楽しんでいただけたでしょうか？

変な終わり方をしてしまったと思っておりますが、喜んでいただけたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9651f/>

黒い子猫がくれたもの

2010年12月22日15時29分発行